

今村葦子『ゆきのよあけ』論

堀畑 真紀子

はじめに

今村作品に通底するのは、作者が子どもの頃、故郷球磨村で体験した時間である。筆者堀畑は、「『ふたつの家のちえ子』論」で、六歳のちえ子が体験した時間を「神話的時間」と称した⁽¹⁾。「神話的時間」とは、「日常的時間（近代的時間）」の対極にあり、能率性・効率性を求めず、ゆったりと流れる自然の時間に近いものである。そしてこの時間は、「異化効果」（大人にとって見慣れたものが別の光を帯びてくる）をもたらし、現代社会の問題点を浮き彫りにするという特徴を持つ。この「神話的時間」は、鶴見俊輔が「熊本子どもの本の研究会」主催の講演会で発したもので、言葉の定義付けが明確に行われていない⁽²⁾。このため、言葉が一人歩きしているという現状である。よって、筆者堀畑は前述した意味で、

又、年齢を小学生までと限定した上で、この時間を「子どもの時間」と改める。

作者にとっての「子どもの時間」は、デビュー作『ふたつの家のちえ子』（1986刊）に描かれている。高度経済成長の波を受けず、慎ましい生活の中で練り広がる「子どもの時間」である。そこには我々が失ってきたものがあつた。今回も、絵本『ゆきのよあけ』を通して、「子どもの時間」とはどのようなものかについて考える。本来なら、絵本論として、今村の文とあべ弘士の絵の両方から考察しなければならないが、本稿では、作者今村の文章のみを考察の対象とする。

本作品は、2012年11月に刊行され、読者層が、大人たち、更に東日本震災の被災者にも広がった。生き抜いた喜びと「あかがね色にそまつた」夜明けへの共感である⁽³⁾。

そこで本稿は、〈のうさぎの子〉の生き抜いた喜びを「通過儀礼」・「縁起・偶然」・「子どもの時間」の三点から考察する

ことで、高度経済成長後、子ども達が失ってきたものを明らかにする。

一 作者の意図

本作品は、「絵本づくり四十年の編集者」が「定年を迎えるにあたっての記念の一冊を作りたいという思いに答えたもの」⁽⁴⁾である。編集者と作画担当のあべ弘士は名作絵本『よあけ』⁽⁵⁾のようなものを作りたいと作者に伝えた。『よあけ』は柳宗元の七言古詩『漁翁』をモチーフとして描かれたものであるが、「老人と少年にドラマがない」ことに作者は注目する。そこで「夜から朝までの命がけのドラマ」「クライマックスは、あかがね色に染まる森の風景と生きる喜びの爆発」とし、「読み聞かせ」も念頭に入れた上で、本作品を生みだした。タイトルを『ゆきのよあけ』としたのは、「雪について語りた」⁽⁶⁾という作者の思いがあった。雪は「親を失った（へのうさぎの子）」にとって親代わりとなる存在で「逃げることでしか生きのびることができない弱い生きものの（へのうさぎの子）」は本能的に雪を知っているといえるでしょう」と述懐する。舞台は、作者が「第二の故郷」と呼ぶ北海道、「三月のわた雪の頃」、知人の「孫息子たちと雪の夜、夜明けにかけて」探索した森である。

二 作品考察

二の一 「通過儀礼」からの考察

「通過儀礼」は「分離の儀礼」「過渡の儀礼」「統合の儀礼」に区分される。この構造は、神話や昔話、童話、冒険物語に多く用いられており、重要な視点である。本作品からは、（へのうさぎの子）が試練を克服し、新しい状態へと変化していく過程を読み取ることができる。そこで、作品考察に入る前に、「通過儀礼」の意味を確認しておく。「通過儀礼」という言葉は、フランスの民俗学者ファン・ヘネップによって提唱された。彼は、その意味を次のように述べている。

ある個人の一生は、誕生、社会的成熟、結婚、父親になること、あるいは階級の上昇、職業上の専門家および死といったような、終わりがすなわち始めとなるような一連の階梯からなっているのである。これらの区切りの一つ一つについて儀式が存在するが、その目的とするところは同じである。つまり、個人をある特定のステータスから別の、やはり特定のステータスへと通過させることが目的である⁽⁷⁾。

「通過儀礼」は綾部恒夫によると、「個人の成長過程」のみ

だけではなく、「ある場所から他の場所への空間的通過や生活条件の変化」、「宗教的集団や世俗的集団から他の集団への移行」などでも執り行われるという⁽⁸⁾。また、区分される儀礼についても、次のように説明する。「分離の儀礼」は「個人

人がそれまでにあった状態からの分離を象徴する形で行われる。旅に出たり、若者宿に入ったり、死を象徴する行為を伴ったりする」。「過渡の儀礼」は「個人がすでにこれまでの状態にはなく、また新たな状態にもなっていない過渡的無限定な状態……きたるべき新しい生活に対処するための学習や修行に努めることが多い」。「統合の儀礼」は「分離の儀礼と過渡の儀礼を終えた個人が新しい状態となって社会へ迎え入れられる儀礼であり、一般に大規模な祝祭が行」われる。本稿では、「のうさぎの子」がこれまでの状態から新しい状態へと成長し、社会に迎え入れられる為の儀式として捉える。

そこで、本作品を三つに区分された儀礼に即して分類し、考察を進める。「分離の儀礼」は、夏の日、母親が狐の犠牲になり、「のうさぎの子」が一人で生きていくことになる場面である。

「にげてっ、はやく」 かあさんがさけんで、べつべつににげて、それから かあさんは、もどってこないのです。まっても まっても、もどってこないのです。そのときから、

のうさぎの子は、ひとりで、くさをさがしてたべ、ひとりで、トゲのある ノイバラのしげみで、ねむりました。そこなら、あんぜんだと、おもったのです。

本来の「通過儀礼」の構造から見れば、「分離の儀礼」は、親子の別れまでである。「そのときから、のうさぎの子は……以降の、一人で食べ物と安全なぬぐらを探す場面は、試練の一つとして「過渡の儀礼」に入る。しかし、ここでは回想の形を用いた、変形構造となっている。それは、作者が「夜から朝までの命がけのドラマ」を描くことに主眼を置いているからである。そこで冬を迎えるまでに、「のうさぎの子」が一人で生きなければならぬ状況を受け入れ、食べ物とぬぐらを探せるまでに成長していることを、短い文章で表現する。

「過渡の儀礼」では、一人となった「のうさぎの子」が二つの試練を乗り越えて、生き抜くまでを描く。

なつとあきが すぎてゆき、ふゆになると、ゆきのしたのかれくさをたべ、かたい木のかわを、かじりました。ねむるのも、やすむのも、ゆきの すあなです。ゆきは、ふとんのように、さむさから のうさぎの子を、まもりました。毛づくろいも、ひとりでおほえました。

「過渡の儀礼」での第一試練は、食べ物と巢穴を探すこと、毛繕いを身に着けることである。冬眠しない（のうさぎの子）にとつて、冬の寒さから身を守り、食べ物を探すのは難しい。しかし、それらを上手くこなしながら、毛繕いも身に付けていく。捕食される側の（のうさぎの子）にとつて、毛繕いは命の危険から身を守る大切なことである。それをひとりで覚え、丁寧に手入れすることを怠らない。このように、（のうさぎの子）にとつての第一試練は、厳しい冬での、食と住の確保、毛繕いを身に着け怠らないことである。この試練を克服し、次の第二試練が課せられる。

みしり、みしつ。ひそかに ゆきをふみしめ、しのびよる あしおとがあります。かざかみから、つよい きつねのにおいが ただよいます。のうさぎの子は、からだじゅうの毛をさかだて、こおりつきます。（中略）キバをむいた きつねが、すあなめがけて おどりかかりました。それよりはやく、のうさぎの子は とびのき、てつぼうだまのように とびだします。（中略）

きつねは すぐうしろにせまり、目のまえは、たちはだかるように そびえたつ、ゆきの山です。のうさぎの子は、さいごの さいごの ちからをふりしほり、いっきに かけあがります。そのとたん、きゅうに、あしが かるくなりまし

た。ふかいゆきが、のうさぎの子の あしを、かるるとささえています。おいつめる きつねのあしは、ふかいゆきのあなに おちていました。ゆき山の木ぎは、その枝えだで、ふくろうのつばさを こばみ、さえぎりました。

狐とふくろうの襲撃である。毛繕いは、敵から身を守る最大の防御である。それを怠つていなかったのも、忍び寄る狐の足音と匂いに気づき、瞬時に飛び出すことができた。また、狐とふくろうの襲撃から逃げ果せることが出来たのは、食べ物の摂取で体が成長していたからである。深い雪山で、（のうさぎの子）の足が軽くなるのも、足の成長を示している。足について、作者は「のうさぎの後ろ足はかんじきをはいたように横幅が広くなつているため走りやすく、又きつねの足は細いためスポツと穴におちる」と説明する⁽⁹⁾。第一の試練、食と住の確保と毛繕いの習得による（のうさぎの子）の成長が、第二試練、狐とふくろうから襲撃の克服へと繋がつたのである。

また、「通過儀礼」の物語で、たびたび登場するのが援助者である。「シンデレラ」の魔法使いのように、童話や昔話、神話に登場する、主人公の試練克服を援助する存在は無視できない。援助者とは、主人公が困難な課題を克服できるように、助言や贈り物をして手助けする存在である。本作品では雪と

雪山の木々である。雪は一人となった(のうさぎの子)を母親のように見守り、雪山では(のうさぎの子)の足を軽々と支える。雪山の木々は、ふくろうの翼を遮る。この雪は、「統合の儀礼」でも、女の子との出会いの橋渡しをする。前述したように、作者は「もうひとつのテーマは雪です。タイトルに『ゆきのよあけ』としたのは雪について語りたいという考えがありました」と述べている。(のうさぎの子)の幸運は雪との出会いによってもたらされた。

「統合の儀礼」は、「よるが、しらじらと あけてゆきます」から始まり、最後の(のうさぎの子)が女の子のもとへ駆け抜けていくところまでである。夜明けを迎え、遠くの間々があかね色に染まり、雪は光に煌めく。雪の森が目覚まし、小鳥がさえずり、アカゲラは「木のドラム」を叩き、リスは銀世界を飛び跳ねる。「ゆきの森が 目をさまし、よあけのうたを うたいはじめ」るのである。この場面は、(のうさぎの子)が、「分離の儀礼」と「過渡の儀礼」を終えて、新しい状態へと進む祝いの祭りに相当する。

のうさぎの子は たちあがり、耳を ぴん！ とたてました。血がたぎり、からだじゅうに ちからが みなぎっています。つよいよるこびが こみあげてきます。…… とん！ とん！ とん！ それは、いきる よるこびの ばくはつで

す。そのよるこびを とおくへ つたえるのは、ふりつもった まっしろいゆきです。よるこびに やさしくこたえる おとを つたえるのも、ふりつもったゆきです。とん！ とん！ とおくからこたえる おとは、「あたし、ここに いるよ。ここに おいで」と、よびかけています。のうさぎの子は、こたえます。「とん！ いま、いくよ。ほく、そこに いくよ！」 のうさぎの子は まっしぐらに かけだします。

(のうさぎの子)の喜びに、返答してくるのは女の子である。作者は「のうさぎの生感からすると春先は出会いの季節で子づくりと発展すること。そのことで未来が示されると考えました」⁽¹⁰⁾と記している。「通過儀礼」の構造を持つ昔話や童話では、試練の克服後、配偶者の獲得、あるいは富の獲得となる。ここでは、(のうさぎの子)が配偶者を獲得すると読む。そして、援助者の「雪」は、二人を結びつける橋渡しとなっている。

従って、「通過儀礼」の構造から読み取れるのは、次のようなことである。「分離の儀礼」で、(のうさぎの子)が母親との別れを受け止め、一人で食べ物とねぐらを探し生き延びる。「過渡の儀礼」では、「分離の儀礼」で身に着けた食と住の確保に、厳しい冬での試練が加わる。ここでの第一の試練は、雪の下から食べ物を探し、冬の寒さから身を守る巣穴を見つ

けることと、天敵から逃れる毛繕いを覚え、手入れを怠らないことであつた。これらを克服して、第二の試練、狐やふくろうから逃げ果せることが可能となつた。二つの儀礼での試練克服によつて〈のうさぎの子〉が心身共に成長し、その結果、「統合の儀礼」での、配偶者獲得へと繋がつていくのである。そして、試練克服で、雪や雪山の木々という援助者が存在することが明らかになつた。

二の二 「縁起・偶然」からの考察

「通過儀礼」の構造から、〈のうさぎの子〉の成長と援助者の存在を読み取つた。ここでは、〈のうさぎの子〉がなぜ、試練を克服できたのかについて、「縁起・偶然」の視点から考える。

今村の作品に「ひとりたりない」⁽¹⁾がある。主人公琴乃の姉志乃が弟周斗をかばい、車に轢かれ亡くなる。悲しみで家族が壊れそうになり、琴乃は祖母に SOS を出す。やつて来た祖母は、手作りの食事を毎日準備しながら、一人一人を見守り続ける。そして、祖母の病気をきっかけに家族が再び食卓に戻つてくる。が、「ひとりたりないんだよっ！」と全員が実感するという内容である。この物語の中で、祖母が琴乃に生きることに述べる箇所がある。

生きてゆくということは、つなわたりとおなじなんだよ。一步一歩が、おちるかもしれない一步なんだよ。おちてしまつたらもう、とりかえしはつかないんだけれども、まえにむかつて歩くよりほかに、進む道がないんだから、しかたがない。(147頁)

生きることは、原因から結果を予測通りに従つて導き出せるものではない。予測不可能なことが多いから、「つなわたりとおなじ」なのである。志乃の交通事故死がそれを示している。換言すると、人生がいくつもの「偶然」の重なりから成り立っているから、予測不可能なのである。

また、作者は「私の中の『ふるさと』」⁽²⁾で、「祖父の死、転居、転校、父の不在。小さな出来事の積み重ねが、幼ない心に、ある種の感情を確実に植えつけ、育てあげてゆきました。それが『無常感』でなかつたと、だれが言えるでしょう」と記している。「偶然」によつてもたらされた出来事に自分の人生が左右され、それが「無常観」に繋がつていったということであろう。

作者は、人生が「偶然」によつて影響を受け、変化していくと考えている。そこには当然、「運」「不運」「幸」「不幸」も存在するが、そのような人生を自分のものとして引き受け、「まえにむかつて歩くよりほかに、進む道」がないと考えて

いる。この「偶然」に対する作者の考えは『ゆきのよあけ』からも読み取ることができる。親子が狐に襲われるのも、（のうさぎの子）が狐やふくろうから逃げ果せたのも偶然の成り行きである。また、援助者である雪や雪山の木々の存在も偶然である。これらの偶然を（のうさぎの子）が、どのよう
うに受け止め、試練を克服していったかを、作品に即して考
えていく。

そこで、まず「偶然」の意味から確認する。「偶然」とは、『日本国語大辞典』⁽¹³⁾によると「他のものとの因果関係もつながらりもはつきりせず、予期しないことが起こること。また、そのさま。思いがけないこと」と記されている。竹内啓は「因果的偶然」を「起こること、あるいは起こったことについて、科学的あるいは論理的に必然性が示されない」とし、それを発生させるメカニズムに、交通事故のように「二つあるいはそれ以上の互いに無関係な因果関係が、同時に働くこと」とによって生じる事象があると説明する⁽¹⁴⁾。この「無関係な因果関係が、同時に働くこと」によって生じる出来事を、南方熊楠は「縁起」で述べている。

因はそれなくて果がおこらず。また因異なればそれに伴って果も異なるもの、縁は一因果の継続中に他因果の継続が竄入（ざんにゅう）し来たるもの、それが多少の影響を加うる

ときは起、（…熊楠、那智山にのぼり小学校教員にあう。別に何のことなきときは縁）。（…その人と話して古え撃剣の師匠たりし人の智ときき、明日尋ぬるときは右の縁が起。）故にわれわれは諸多の因果をこの身に継続しおる。縁に至りては一瞬に無数にあう。それが心のとめよう、体にふれようで事おこし（起）、それより今まで続けて来たれる因果の行動が、機動をはずれゆき、またはずれた物が、軌道に復しゆくなり。⁽¹⁵⁾

ここでは、二つの因果律が示されている。一定方向を持つ二つの因果律が交叉して出会っても、それぞれの方向性が変わらないのを「縁」。一定方向を持つ二つの因果律が交叉し出会ったことで、それぞれの方向性が変わってしまうのを「起」。二つの因果律が、偶然的な出会いによって「縁」あるいは「起」となるということである。

「縁起」はそもそも仏教で用いられる言葉で、「因と果にさらば縁を加えて世界を見ていくものである。つまり、因というものは、直接的な原因、縁というのは間接的な条件であって、この直接的な原因と間接的な条件とがあいまって、はじめて果がありうる、ということ」で、「縁起とは…いろいろな要因が重なり合って何かのことが起きること」であると、竹村牧男が説明する⁽¹⁶⁾。

以上をまとめると、「偶然」は必然性の否定で、因果関係が

なく、予期しない出来事が起こるさまの意味である。一方、「縁起」は、ある方向へ進む因果律に対して、別の因果律が、偶然に交叉し、その後の人生に影響しないのを「縁」、影響するのを「起」と呼ぶ。「起」は、「直接的原因」と「間接的條件」とが作用し合つて何かが起きることで、その起きた結果が「果」となる。「偶然」と「縁起」の意味の、詳細における差異は否めないが、本稿では同意として扱っていく。

『ゆきのよあけ』では、いくつもの「縁起・偶然」が存在するが、それを一つ一つ紐解き、説明することは難しい。そこで、〈のうさぎの子〉にとつて「起」となる場面を「通過儀礼」に即して示すと、「分離の儀礼」では母親の死、「過渡の儀礼」では狐とふくろうの来襲、「統合の儀礼」では新しい仲間への許への快走となる。ここでは、物語の中心となる「過渡の儀礼」における「起」を詳細に分析していく。

まよなかを すぎたころ、くもがきれて、おつきさまがおをだしました。……森のなかは、きゆうにあかるくなりました。……ふくろうは、えものを まちぶせています。みしり、みしつ。ひそかに ゆきをふみしめ、しのびよる あしおとがあります。

月の光で森の中は明るくなり、ふくろうが獲物を待ち伏せ

し、狐が巢穴を狙う。ここから、〈のうさぎの子〉が逃げ果せるまでを「起」とする。この「起」の前に、野ねずみがイタチの犠牲になる場面がある。「かさ、こそ、とん！ とつ、とつ、とととつ！」と、駈けていく野ねずみをイタチが襲う。ここは、母親が狐の犠牲になったことと同じ意味を持つ。つまり、弱者の運命である。母親や野ねずみにとって、狐やイタチに襲われることは「起」であり、強者と弱者の関係から、死を免れ得なかったという「結果」をもたらした。しかし、〈のうさぎの子〉はその弱者の運命を覆す。

せなかにせまる、きつねの あかいくち。それから、ふくろうの するどいかぎづめが ふりかかります。のうさぎの子は、しにもぐるいで ゆきをけります。(中略)

きつねは すぐうしろにせまり、目のまえは、たちはだかるように そびえたつ、ゆきの山です。のうさぎの子は、さいごの さいごの ちからをふりしぼり、いつきに かけあがります。そのとたん、きゆうに、あしが かるくなりました。ふかいゆきが、のうさぎの子の あしを、かるがるとささえています。おいつめる きつねのあしは、ふかいゆきのあなに おちていました。ゆき山の木ぎは、その枝えだで、ふくろうのつばさを こばみ、さえぎりました。

〈へのうさぎの子〉は狐とふくろうから死にも狂いで逃げる。そして、「きつねは すぐうしろにせまり、目のまえは、たちはだかるように そびえたつ、ゆきの山」という絶体絶命の危機に陥る。作者はこの場面を、「へのうさぎの子」は精神的にここで一度死ぬのですが、死にもぐらういで踏み出した一歩が思いがけず、〈へのうさぎの子〉を上へ上へとはね上げ、死は生へと変わります」⁽¹⁷⁾と述べる。絶体絶命の苦境に追い込まれ精神的に諦めた時、肉体が一步を踏み出す。その瞬間、これまでと違って足が軽くなる。ここは、〈へのうさぎの子〉が、雪山に適應する身体に成長していたという、自己発見の場面である。これを説明しないのはスピード感と緊張感を失わない為である。一方、きつねは深い雪に足を取られ、ふくろうは雪山の木々に拒まれる。こうして、のうさぎ子は無事に逃げ果せる。

では、何故、〈へのうさぎの子〉は弱者の運命を覆すことができたのか。一つは、厳しい冬でも食べ物を手に入れ、安全な巣穴も確保出来た事。二つ目は、耳や後ろ足の毛繕いを怠っていないかった事。三つ目は、母親の教えが身につけていた事。この三つ目については、狐が巣穴に忍び寄って来る時、「動かないで。じつとふせてっ」という母親の声が、〈へのうさぎの子〉の耳の奥に響いたことより読み解くことができる。ここまでの三点は、〈へのうさぎの子〉自身が習得してきた事である。

換言すると、「縁起」によって自分の力を高めてきたことである。四つ目、山の斜面の深い雪が〈へのうさぎの子〉の足を支えた事。五つ目、深い雪に狐が足を取られ、木々によってふくろうの翼が進路を阻まれた事。この二点で描かれる、深い雪と木々の存在は偶然であり、他者の援助を意味する。「雪」が、〈へのうさぎの子〉にとって母親的な存在であることは、前述したように作者が指摘している。他者の援助という「偶然」が〈へのうさぎの子〉の運命に加わるのである。

従って、「縁起」による行動(反応)で自己の力を高め、そこへ偶然、自然の援助者が加わり、双方が作用し合って、〈へのうさぎの子〉が生き延びるといふ結果が生れたのである。「縁起・偶然」は「必然性の否定」で、予測不可能なものである。そこには、運命を覆し、希望をもたらすという面が備わっている。逆に言うと、全てが必然的であり予測可能であったら、夢や希望は存在しない。〈へのうさぎの子〉の幸運は「縁起・偶然」によってもたらされたのである。

二の三 「子ども時間」からの考察

〈へのうさぎの子〉が弱者の運命を覆すことが出来たのは、「縁起」による行動(反応)で、自己の力を高め、そこに偶然、援助者が加わったことによる。しかし、それだけでは説明が不十分である。運命を好転させるには「縁起」による

「行動」が重要なのである。行動なしで、物事は展開しないからである。ここでは、作者が球磨村で体験した「子どもの時間」を示しながら、「行動することについて考えていく。

小学生の頃、作者の日常は、本の世界と野山や大川の野原で駆け回る世界の中にあつた。内気な性格で喋ることが苦手な作者は、作中人物と喜怒哀楽を共にし、励ましを感じ取つた。その一方、村の子達が野山や河原で駆け回つて遊ぶのにもついて行つた。そこは、草花や河原の石が遊び相手で、それぞれ好き勝手に遊ぶことが許される場所であつたからである。

内山節は「人間の成長の過程は、関係の拡大」と主張し「幼い頃は、誰でもが限定された関係の中に自分の存在を作り出している。はじめは母親との関係がすべてだつたといつてもよいかもしれない。ところが成長するにつれて結んでいく関係がふえていく」⁽¹⁸⁾と説明する。その関係は人間だけではなく、自然や文学、本、動物なども含まれる。成長はそれらと主体的な関係を創り出していくことである。又、発達心理学の立場から岡本夏木は、「人間の生き方の基礎」を培う「幼児期」での「しつけ」と「遊び」の重要性を説く。「しつけの場は、子どもが自己の実現と他者との関与の統一という『生きる』ことのもつとも中心をなす課題に遭遇する場であること、遊びは、子どもがその『現実を超えてゆく』力を自ら培つてゆく場であること」とし、「現実を超えてゆく」力の

中心をなすのが「遊びの中で育つ想像力」⁽¹⁹⁾であると述べる。本の世界と遊びの世界の中で過ごした小学生の頃の作者は、自然や友達、集団、動物、本などと関係を結びながら、「想像力」も養っている。この関係の拡大と想像力の育成は幼児期からの延長と考えてよい⁽²⁰⁾。

作品では〈のうさぎの子〉の幼児期が描かれていないが、行動から読み取ることが出来る。野ウサギは、捕食される側の草食動物である。天敵は多く、逃げるしか生き延び得ない弱者である。その弱者の子どもが本作品の主人公である。

〈のうさぎの子〉の幼児期は、母親の保護の下で暮らしていた時である。その時期に、〈のうさぎの子〉が主体的に自然と関係を結んでいたことは、母親と離れ、夏から秋にかけて食べ物や巣穴を探し、生き延びていく様子で分かる。また、「過渡の儀礼」での狐やふくろうの襲撃に対する行動からも、幼児期に他の生き物と関係を持つていたことが窺われる。

作者の故郷、球磨村渡には球磨川が流れており、その岸辺が子ども達の遊び場であつた。服は「草の汁やかぎ裂きや穴だらけ」で、いつもボロボロだつた。「夕暮れふらふらになつて」帰宅し、「あまりに疲れすぎて夕ごはんはんに手をつけずいつまでもぼんやりと座つていて、毎度、母に注意された」⁽²¹⁾という。

川遊びにしろ、木登りにしろ、ただの野原での遊びにしろ、危険に出会います。ヒヤッとしたことも何度もあります。子ども心に「危なかった」と思うことはしょっちゅうです。こういったことは親には一切言いません。なんとか自分でしごきます。そして「なぜ」と考えます。「どうすれば」と考えます。こういった体で覚えた体験が出来たことは良かったと思います。この世界のすべてが現実のものとして目の前にありました。図鑑ではなく五感で、触って匂いをかいで覚えめました。野山での遊びのほとんどは、食べられるものを探すことです。(22)

作者の球磨村での時間は、生活の中に溶け込んだ、自然の中から生みだされていた。自然への恐怖におののきながらも主体的に働きかけ、達成感や喜びなどを五感で感じ取っていった。「もともと遊びはおとなの管理と干渉を離れたところで成立し、子ども自身の特性がもっとも發揮される場」であり、中でも「身体性と結びつく遊び」は「自分全体をとらえる身体的感覚と、それと一体化した快感情を楽しむとともに、危険に挑戦して達成する時の喜びや自己の力への信頼感を身体を通して具体的に知ってゆく」と、岡本夏木が述べている。また、子ども達は「遠くから、あるいはそばに一緒にいて、おとながじっと見守ってくれる。じゃまされないで、

見守られて、自分がしたいことができ、しかもそれが許されるという安心感のなかで、子どもは自分と世界を確かめながら、自分のペースで主体性を育てて」いけるようになる」と、高垣忠一郎が述べる(23)。

このように信頼する大人に見守られながら、子どもは自分のペースで、自然や周りの人々と直にぶつかり合い、関わり合っていく。そして、何かを成し遂げた時、喜びや達成感、自己に対する自信を持つようになる。一方で、己の無力さや自身がちっぽけな存在であることなども五感で感じ取っていく。これらの体験は全て「行動」によって導かれる。これが「子どもの時間」の特徴である。そして、作者の原風景もここに(24)。

「にげてっ、はやくー」 かあさんがさけんで、べつべつににげて、それから かあさんは、もどってこないのです。まっつも まっつも、もどってこないのです。

ここは、母親が我が子を助けるために犠牲となる場面で、母親の(のうさぎの子)への愛情を象徴している。また、母親と別れた後、「ノイバラのしげみで、ねむりました。そこなら、あぜんだと、おもったのです」では、(のうさぎの子)が直感を働かせていることが分かる。この直感は、冬に食べ

物や巢穴の確保、天敵に襲われた時の行動にも窺われる。直感、失敗の積み重ねによって培われる。これより、〈のうさぎの子〉が幼児期に、安全な巢穴や食べ物を探す習練をしていたことがわかる。また、雪の巢穴に狐が近寄つて来た時、「へうこかないで！ じつと ふせてっー」 かあさんのこえが、耳のおくに」響く。母親の声が耳の奥で聞こえるのは、それまでの習練が身につけていることを表す。幼児期の〈のうさぎの子〉に、母親は弱者として生き抜く方法を教えていたのである。これら全てが、母親の愛情に裏打ちされていたことは容易に想像できる。このように母親から愛情を注がれ、〈のうさぎの子〉は幼児期を過ごしていた。岡本夏木は「子どもが未知の状況に踏みこんでゆく時の不安を和らげ、勇気を補給」する拠り所として「安全基地」である母親など「好きな人」の存在が必要であると述べる。〈のうさぎの子〉にとって「安全基地」は母親であった。そこを拠り所として、行動範囲を広げていったことが想像できる。

そして、それまでの体験を踏まえ、古い自分から新しい自分へと生まれ変わるための試練が始まる。この試練で、重要なのが「行動する」ことである。作者は、野山や大川の岸辺で遊んだ、子どもの頃の体験が「今もいきいきと息づいて」おり、「動くことで現実を理解しています」と述べる⁽²⁵⁾。この「動くことで現実を理解」する姿勢、換言すると、あれこ

れ考え過ぎて、幻想に惑わされ動けなくなるより、まず動いて現実を認識する姿勢、これが生き抜く為に必要とされるものである。〈のうさぎの子〉にとって母親との別離は厳しい試練である。しかし、〈のうさぎの子〉は生きる為に行動する。「くさをさがしてたべ、ひとりで、とげのあるノイバラのしげみ」で眠り、冬になると雪の下の「かれくさをたべ、かたい木のかわを、かじり」、雪の巢穴で眠る。天敵から身を守るための毛繕いも一人で覚え、それを怠らない。狐とふくろうに追われ、眼前に雪山が立ちはだかるという絶体絶命の中でも、反射的に肉体が動く。このように、どのような状況になっても「行動する」姿勢を〈のうさぎの子〉は崩さない。換言すると、生きようとする力を持ち続けるのである。

また、捕食される側である〈のうさぎ子〉は、常に「死」を意識している。それは「しのびよる あしおとを ききのがさないため」「おそろしい きつねや ふくろうから、すばやく にげるため」に、毛繕いを丁寧に行うことから理解できる。生きるという生命の根本的な問題に直面すると、何が一番大切なかがわかる。高垣忠一郎は、『死』を前にして、あらためて命のかけがえのなさ」に気づくと、今まで「しがみついていた小さな価値観」が崩れるという。死を意識することで「行動する」態度が生まれる。

このように、母親という「安全基地」を持つていたこと、

死を意識していたこと、この二点によって（へのうさぎの子）に「行動する」態度が生まれた。そして、一人で生き抜いた時、喜びと「自己の力への信頼感」が生まれる。それを、（へのうさぎの子）は身体全体で表現する。

のうさぎの子は、たちあがり、耳を ぴん！ とたてました。血がたぎり、からだじゅうに ちからが みなぎっています。つよいよろこびが こみあげてきます。

とん！ とん！

うしろあしで おもいつきり つよく、ゆきをたたきます。

とん！ とん！ とん！

それは、いきる よろこびの ばくはつです。

「子どもの時間」は能率性、効率性を求めない。だから、何度も失敗を繰り返すことができる。失敗を通して、自分の弱点を知る。その弱点を認めた上で、再び課題に挑戦する。ここが、子どもの時間の大切なところである。高垣は「子どもの心の発達には『各駅停車』と言う。」「三歳の子どもは三歳の世界を十分に生き、経験することをおして、そこで得た土産を心にくわえ、三歳に『さようなら』を告げ、つぎの四歳に『こんにちは』を告げる」ことで、「子どもは自らの人格と生き方を支える心をかたちづくっていくことができる」と

述べる。本作品は、弱者が「行動」していくことで「自己の力への信頼感」を培っていく、「子どもの時間」を描いているのである。

おわりに

「子どもの時間」は、大人に「異化効果」をもたらす。岡本夏木も幼児期を「現代文化に対する一つの『対抗文化』としてとらえる視点」、つまり「幼児期本来の姿から、社会全体、文化全体のあり方を見る視点」として捉えている。「真の幼児期」は「社会を常に人間的に批判し、自己を人間的存在たらしめてゆく視座」であり、大人はこの視座を内在させて、現在を生きているという。よって、「子どもの時間」は、子どもにとって「人間の生き方の基礎」を培う時間であり、大人にとっては現代社会が抱える問題を浮き彫りにし、解決の糸口を見いだすことができる時間であるといえる。

『ゆきのよあけ』では、「過渡の儀礼」に物語の中心が据えられた。母親を失った（へのうさぎの子）が「縁起・偶然」によって、弱者の運命を逆転させる。それを可能としたのが、それまでの習練と雪という援助者の存在、「行動する」ことであった。そして、ひとり生き抜いたことが「自己の力の信頼感」へと繋がった。「子どもの時間」は、能率性・効率性を

求めず、ゆっくりと流れる時間である。失敗を繰り返しながら、何度も挑戦し、喜びや達成感を身体で認識していく。そして、「自己の力への信頼感」を培っていく。このような主体的、創造的な時間が「子どもの時間」である。しかし現在、その時間が蝕まれている。一九六〇年代の高度経済成長以降、「競争原理」浸透の中、大人たちは子ども達に「早く、早く」と急ぎ立て、成長過程を疎かにしてきた。そのため、子ども達の内面に「競争社会で勝ち残れる能力、特性を備えた『よい子』でない」と、見捨てられるという不安や「部分的に否定されただけで、丸ごと否定されたように感じて傷つき、パニックをおこすような感受性」が形成されていると、高垣が指摘する。本作品は「子どもの時間」の本来の姿描いている。これによって、読者は「生きること」の意味を考え、子ども達が失ったものを感じ取るであろう。

注

- 1 拙稿「ふたつの家のちえ子」論(上)『国語国文学研究』第49号 熊本大学文学部国語国文学会(下)『方位』第31号 熊本近代文学研究会 参照
- 2 『神話的時間』熊本子ども本の研究会 1995
- 3 今村葦子氏と筆者堀畑との往復書簡(以下 書簡と記す) 2016・6 『ゆきのよあけ』を百回声に出して読んだという女

性からの便りに、震災翌日、避難していた寺から見た夜明けが、山や静まりかえった海をあかがね色に染めていく、その美しさは一生涯忘れられないという感想があった

- 4 書簡 2012・12
- 5 『よあけ』ユリー・シルヴェイツ作・絵 瀬田貞二訳 書簡2019・6
- 6 書簡2019・6
- 7 『通過儀礼』ファン・ヘネップ著 綾部恒夫・綾部裕子訳(2012(1977初刊)岩波文庫)
- 8 綾部恒夫『通過儀礼』『日本大百科全書』 書簡2018・4
- 9 注9に同じ。(のうさぎの子)の喜びに返答してくるのを女の子とするのは、母親との別れ(死)を通して現実の厳しさを描くという作者の考えがある。
- 11 今村葦子「ひとりたりない」理論社 2004刊。筆者堀畑はこの作品を、物語構成とテーマが似ていることから、『ゆきのよあけ』の対として位置づける
- 12 『読売新聞 西日本版』(1990・12・20)
- 13 『日本国語大辞典』第二版(2001 小学館)
- 14 『偶然とは何か』(2010 岩波新書)
- 15 『南方マンダラ』(1991 河出書房)
- 16 『入門 哲学としての仏教』(2009 講談社現代新書)
- 17 書簡2019・9

18 『子どもたちの時間』(2015 農文協)

19 『幼児期』(2005・5 岩波新書)

20 『ふたつの家のちえ子』(1986 評論社) この作品は、作者が幼少時代、祖父母の家と両親の家を行き来した体験を基に描かれている。執筆動機は、故郷球磨村には「都会にないものがすべてととのっている」という思いと、戦後の平和な時代の記憶を多くの人と共有することで希望に繋げていきたいという考えからである。

21 書簡2019・7

22 「熊本子ども本の研究会 講演録」2018・7・1

23 『生きることと自己肯定感』(2004 新日本出版)

24 岡本夏木は「幼児期の経験の中でもその細分や状況の文脈はわからぬまま、強い知覚的印象が残り、しかもそれがその後の自分の思考形成に大きい影響をもってゆく体験」を「原風景」と呼ぶ。

25 注21に同じ

『ゆきのよあけ』の引用は童心社 2012・11による。

【附記】本稿執筆に際して、作者である今村葦子氏より貴重な資料とご教示を賜りました。記して深く感謝申し上げます。

(ほりはた・まきこ 日本児童文学学会会員)